チェロとハープという超レアな編成のデュオ。伊藤悠貴と中村愛が昨年6月のオール・フォーレ・プロに続いて登場する。「前回のフォーレで、チェロとも対等に渡り合えるハープという楽器の可能性を示すことができました」（中村）と、この編成に改めて確信を得た模様。中村のYouTubeチャンネルには、なんと《レクイエム》全曲をチェロとハープだけで演奏したその時の映像がUpされており、一見の価値あり。

今回は生誕150年のラフマニノフ。ラフマニノフをライフワークとして愛する伊藤が練りに練った選曲だけに奥が深い。バッハ、シューベルト、シューマン、チャイコフスキーが並ぶ前半は、一見ラフマニノフと無関係と思いきや、しっかりトリビュートになっている。

「ラフマニノフが大きな影響を受けた作曲家たち。いわば“作曲家ラフマニノフができるまで”です。たとえばシューベルト。ラフマニノフは歌曲を書くにあたり、シューベルトを相当勉強して影響を受けています。今回演奏する〈セレナーデ〉などはピアノ独奏版に編曲してレコーディングしているぐらい。シューベルトを外すわけにはいきません。そしてシューマン。ラフマニノフのピアノ曲に着目すると、ショパンとシューマンが重要です。ショパンの影響は広く知られていると思うのですが、ラフマニノフの作品の中に実はシューマンの色合いの強い部分があることは意外と気づかれていません」（伊藤）

後半はたっぷりラフマニノフ。軸は歌曲だ。初期から後期まで年代を辿るように抜粋した。

「初期にはチャイコフスキーの匂いがぷんぷんするようなロマン派的な作風だったのが、最後はもう、旋律の美しさになどこだわっていないかのよう。その変遷がよくわかると思います」（伊藤）

「後期になるにつれて象徴主義的というのか、言葉の“意味”よりもその“響き”で音楽を作っているのが顕著なんですね」（中村）

「器楽だからこそ、言葉の壁を超えて、人の声の奥底に隠れている器楽性、象徴性に光を当てたいと思っています」（伊藤）

ラフマニノフへの思いが満ちた構成。自他ともに認めるラフマニノフ・マニアの伊藤をして「かなりお腹いっぱい」と言わせるほどだ。公演が待ち遠しい。

取材・文／宮本明（音楽ライター）

浜離宮アフタヌーンコンサート
伊藤悠貴（チェロ）&中村愛（ハープ） デュオ・リサイタル
～ラフマニノフ生誕150年記念～

6/29（木）13：30　¥5,000　3/18（土）発売

シューマン：3つのロマンス Op.94
チャイコフスキー（M.J. ルパート編）：「くるみ割り人形」組曲より「花のワルツ」
ラフマニノフ：前奏曲「鐘」〈ハープ独奏〉
曳舟人夫の歌
ヴォカリーズ
交響曲第2番より第3楽章「アダージョ」　ほか